

序章

研究目的と方法

タイトルに示した「伝統武芸」とは 2008 年の法令「伝統武芸振興法」に用いられた表現である。そこには「伝統武芸とは、国内で自生して体系化したか、外部から輸入されて国内で独創的に定型化・体系化された武的功法・技法・格闘体系として、国家的次元で振興すべき伝統的・文化的価値があると認められるものをいう¹⁾」と定義されている。

伝統武芸の「武芸」という表現は、日本の「武道」、中国の「武術」と差別化して韓国マージャーナルの文化的独自性を重視するために韓国政府が提唱したものであった。

従来、韓国には、武術、武芸、武道の語を区別して用いることはなかったが、近年において研究者の間に概念定義の動きがあり、これを上記の法令作成に関わった国会文化観光委員会が受けて検討し、その結果、武芸の語を選定し、これに伝統の語を冠したものであった。

現在、韓国では多くの武芸が行われている。中でも、韓国の国技とも言われオリンピックの正式種目になっているテコンドー、韓国式相撲であるシルム、韓国の武芸の中でも古い歴史を持ち、曲線的な身体の使い方に特徴がある「テッキョン：택견」、真剣を使って太刀筋を修練する「海東剣道」、朝鮮時代に作られた兵法書『武芸図譜通志』を元に復元した「二十四班武芸」などがよく知られている。さらに、日本から伝えられた柔道、剣道、空手道、合気道、居合道、また中国武術、タイのキックボクシング、ブラジリアン柔術などの武芸も行われている。

本研究は、こうした諸武芸が行われる中、韓国政府が新しい文化政策として「伝統武芸」を創造していく過程を、その創造に対してより強く影響したとみなされる 3 つの武芸、すなわちテコンドー、テッキョン、海東剣道の分析から、明らかにすることを目的としている。

この目的を達成するため、本研究では、文献研究とフィールドワークとを総合する。フィールドワークは、テコンドー、テッキョン、海東剣道のそれぞれの協会において、行っ

¹⁾ 文化体育観光部、「伝統武芸振興法 第 2 条」、2008

たもので、文中特に注記がない場合は、これらの聞き取りによって得られた情報によっている。

なお、本論文では、直接引用の場合を除き、韓国のマーシャルアーツについて言う場合、法律用語である武芸の語を統一的に用いることにする。また、ハングル文字で書かれていても、元々が漢字で表記されたものである場合は、訳出に際し、元の漢字を当てた。また、発音のみが明らかで、元の漢字を推測できない場合は、これをカタカナ音表記で訳出した。

先行研究の検討

韓国における武芸研究は年々増えている。近年においては自然科学系（生理学、力学、栄養学）の研究が多いが²、人文社会科学系の研究も多く見られる。これらの内容を次に紹

² 以下は、武芸に関する自然科学系の研究である。原文はハングルであるが、日本語に訳出した。

イ コンノ、「武道選手たちの試合前 競争不安に関する研究」、建国大学大学院修士論文、1997

ガ キョンファン、「柔道、テコンドー選手の運動傷害に関する臨床的分析」、龍仁大学大学院修士論文、1998

ユン ヒョン、「柔道の内またを掛ける際に、受ける姿勢による下肢関節の運動力学的分析」、

龍仁大学大学院博士論文、2004

キム ゼホ、「警護員の武道修練形態が身体組成と心肺機能に及ぶ影響」、ソウルスポーツ大学院大学校修士論文、2004

ジ チファン、「丹田呼吸訓練がテコンドー選手の心肺能力に及ぶ影響」、龍仁大学大学院博士論文、2005

イ ヒョンミン、「武道選手たちのストレスが脱力に及ぶ影響：剣道、柔道、テコンドーを中心に」、

成均館大学大学院博士論文、2005

ヨム ジュンイル、「柔道選手の最大運動時の心肺運動能力と主観的運動強度の信頼性検証に関する研究」、

龍仁大学大学院修士論文、2006

ハン ドンジン、「テコンドー訓練者と非訓練者の免疫ホルモンと免疫グロブリンの差異分析」、

龍仁大学大学院修士論文、2007

イ ガンムン、「テコンドーの回し蹴りの際に、中央及び前方型の立ち姿勢による運動力学的比較分析」、

龍仁大学大学院博士論文、2009

ハン スンフン、「柔道選手の最大運動の後、酸素摂取濃度の差が生理的疲労要因と酸化ストレスに及ぶ影響」、

龍仁大学大学院博士論文、2010

介する。

**羅永一 (1992) : 「朝鮮朝 武士体育に関する研究 : 武士試取制度を中心に」、
ソウル大学大学院 博士論文、韓国**

この論文は、朝鮮時代の武士採用試験で行われた武芸について論じたものである。朝鮮に軍役制度の中で行われた試験の内容やその様子を、文献史料を用いて明らかにしている。そして、武術、武芸、武道の語を概念的に区別した最も早い時期の研究である。

**チェ ジョンサム (1996) : 「武道競技規定の変遷に関する研究」、
明知大学大学院 博士論文、韓国**

この論文は、武芸が競技化される過程を論じたものである。柔道、テコンドー、剣道、ウーシュー、シルムを対象に、それぞれの競技化以前の状態からルールが整えられ競技として定着していく過程が歴史的に明らかにされている。

**キム ビョンチョン (2000) : 「我が国の武道の現況と課題に関する研究」、
龍仁大学大学院 修士論文、韓国**

この論文は、韓国の武芸における現在の状況を論じたものである。武芸指導者の資格と数、専門武芸と生活体育としての武芸、武芸団体の法人化という側面から考察を行っている。そして、武芸理念の不確実性、商業主義、学問的研究の欠如などを問題点として指摘している。

パク スンヨン他、「武道選手たちの体格と皮下脂肪後の測定による栄養状態に関する研究」、

龍仁大学武道研究所誌 4 (1)、1992

ユン イクソン他、「闘技種目選手の体格と皮下脂肪の厚さ測定による栄養状態に関する研究」、

龍仁大学武道研究所誌 5 (1)、1993

キム ウィファン、「柔道の背負い投げの力学的特性分析の事例研究」、龍仁大学武道研究所誌 8 (2)、1997

イ サンチョル他、「柔道選手たちの最大運動と運動後の回復期 ROS 反応」、大韓武道学会誌 17 (1)、2006

アン チャンシク、「高校柔道選手たちの身体組成と無酸素パワー要求量」、大韓武道学会誌 11 (1)、2009

ヤン チャンフン (2003) : 「日本統治下の武道関連団体に関する考察」、

龍仁大学大学院 修士論文、韓国

この論文は、日本の占領期に韓国で行われた武芸とその定着過程を論じたものである。学校、警察、民間団体などに区別し、そこで行われた武芸と日本からの影響について述べている。

李承洙 (2003) : 「創られた韓民族スポーツ」、

早稲田大学大学院 博士論文、日本

この論文は、現在韓国で民族スポーツとして伝えられているものが、実は 1948 年韓国が建国された後、混乱する社会背景の中で民族意識を高めるための意図をもって韓国政府が復活させた民族スポーツであったという主旨で書かれたものである。全国民俗芸術競演大会から大綱引き、弓道、車戦などを事例に韓国社会の中で伝統文化と認識される民族スポーツが実は政府によって復活され創られたことを指摘している。

イ ゼハク (2006) : 「韓国武道の近代的変遷過程に関する研究」、

龍仁大学大学院 博士論文、韓国

この論文は、韓国における武芸の近代以降の変遷過程を成立期（1910~1945）と発展・拡張期（1945~1980）に分けて考察を行ったものである。そこでは、日本占領期が武芸の近代的土台作りの時期と捉えられ、独立後の状況が独自の発展として、テコンドーなどにおける国際化、生涯スポーツ化、また伝統的武芸の復活や新興武芸の誕生などに分けて論じられている

しかし、武芸を伝統的なものとして捉えながらも、歴史的記述に終始して、本研究が問題とするような創造（invention of traditional）という観点からは触れていない。

シン ヨンホ (2007) : 「韓国武芸変遷史研究」、

又石大学大学院 博士論文、韓国

この論文は、武芸を時代ごとに分類し、その背景と特徴、そして武芸思想について詳細に論じたものである。しかし、その視野は三国時代から現在まで至っているものの、現在行われる多くの武芸が韓国に古くから存在したと主張している。

キム ヨンボム (2009) : 「武道関連学科の教育科目に関する研究 : 韓国、日本、中国、米国の武道学科を中心に」、慶熙大学大学院 博士論文、韓国

この論文は、東洋の武芸を1つの学問として取り上げた例として、韓国、日本、中国、米国の大学に設けられた武芸関連学科を対象に、そこに展開される教育内容の比較分析を行って、武芸教育の現況を明らかにしたものである。

**南鐘旋 他 (1988) : 「武道思想に関する考察」、
龍仁大学武道研究所誌、1(1)、pp.63~72、韓国**

この研究は、中国、日本、韓国の武芸思想を説明した上で、結論的に武芸は自己修養の道であり、他人のために奉仕することが目的であることを述べている。

**キム ウォンギ (1995) : 「韓国武道の歴史的考察」、
韓国スポーツリサーチ 16(3)、pp.915~924、韓国**

この研究は、韓国の武芸の発展史をあつかうものの、歴史的再構成でなく、民族主義的に韓民族とその武芸の起源を紀元前 2333 年の古朝鮮以前の韓に求める史観を提示している。

**ジョン サムヒョン (1996) : 「韓国武道史研究」、
韓国体育学会誌 35(4)、pp9~26、韓国**

この研究は、中国は武術、韓国は武芸、日本は武道という考えを否定し、武術<武芸<武道という概念包摂関係を提案している。

**キム サン Chol 他 (1996) : 「現代武道論研究」
龍仁大学武道研究誌 7(1)、韓国**

この研究は、韓国武芸を哲学的に考察した上で、体育科教育の視点から武芸を論じている。

**キム ホンソク 他 (1997) : 「武道のスポーツ社会化に関する考察」、
体育科学論叢 10、pp.77~92、韓国**

この研究は、武芸のスポーツ化を論じたもので、スポーツ化は武芸に遊戯性、規則性、

公正性、組織性をもたらすことを指摘し、さらに武芸が重んじられた精神文化はパフォーマンス向上に従属させられる傾向のあることを指摘している。

楊纘芳 (1998) : 「武術、武芸、武道概念に対する新しい認識の枠」、

龍仁大学武道研究所誌 9(1)、pp. 19~29、韓国

この研究は、国による区別あるいは術から道へとする、従来の武術、武芸、武道に対する概念より、武芸の普遍的価値を求めて、より広い思想的、哲学的の視点から見るべきであることを提唱したものである。

キム チャンヨン 他 (2001) : 「武術、武芸、武道の用語定立のための課題」、

龍仁大学武道研究所誌 12(1)、pp.61~73、韓国

この研究は、武芸における普遍的価値を統合して、世界化につながる統合的な理論体系が必要であることを述べたものである。そして、その上、人間社会の文化的機能を背景に、学問的研究を通して、武術、武芸、武道の概念を規定するべきであると述べている。

ジャン ゼイ (2001) : 「我が国の武道における問題点と発展課題に関する研究」、

大韓武道学会誌 3(1)、pp.117~131、韓国

この研究は、体育のカテゴリで扱われている韓国武芸に対して、その問題点として、韓国的であるとする本質の主張の問題性、商業主義と競技化による本質の喪失、学問的研究の停滞を挙げて、将来の武芸の発展のためには武芸哲学の確立、武芸団体の統合組織化、競技方式の多様化、学問的研究の展開などが必要であることを説いている。

羅永一 他 (2001) : 「伝統武芸の問題点と課題」、

大韓武道学会誌 3(1)、pp.295~314、韓国

この研究は、伝統は創造されるものとして、伝統武芸も昔のものに縛られることなく、今日の社会に適応すべく変容するべきであることを述べている。

ジャン ゼイ (2004) : 「武道の形態的变化による現代的意味」、

大韓武道学会誌、6(1)、pp.111~138、韓国

この研究は、武芸の歴史と現代におけるその意味を論じたものである。まず柔道、テコ

ンドー、剣道をモデルに武芸の発展史を述べ、武芸は生存のために自然発生し、その後技法が創られ、武芸として発展し、近代以降には体系化と競技化を経験し、そして現代では自己修養の教育的な意味が重視されることを述べている。

**イ ソンジン他 (2004) : 「韓国現代社会の発展と武道の役割」、
大韓武道学会誌 6(1)、pp.111~127、韓国**

この研究は、本来人格教育を目的とした武芸が現代においてその意義を変容させていることを指摘した上で、そのもとの形を取り戻すべきこと、また正しい倫理観のもとで行われる運動文化として発展させるべきことを提案している。

文化観光部 (2004) : 「民俗競技及び伝統武芸の活性化方案」、韓国

この書は、8人の研究者の論文からなっており、武芸を民俗競技と捉えた上で、その文化的価値、現況と問題点、観光資源としての開発法、法案化、国際化などについての論じ、武芸をいかに活性化するかについて提言している。しかし、民俗競技についての概念規定は行っていない。

**ジャン ゼイ他 (2005) : 「韓国武道の再定立に関する研究」、
大韓武道学会誌 7(2)、pp93~114、韓国**

この研究は、武芸が体育と関連するだけではなく、政治、経済、文化、軍事、科学などとも関連しているため、武芸を体育の下位概念ではなく、新しい学問範疇として、自然科学、社会科学、歴史学、人類学の諸側面から総合的に研究すべきであると述べている。

**キム ギルピョン (2006) : 「現代武道の修練文化探索」、
韓国スポーツリサーチ 17(5)、pp1169~1178、韓国**

この研究は、武芸が求めている修練の価値を、精神修練文化、倫理的修練文化、宗教的修練文化、身体健康的修練文化と区別し、その修練を通して得られる人格修養と民主意識の形成、そして価値観の定立などが、韓国社会の文化として定着すべきであると提唱している。

**ソン スボム他 (2006) : 「外来武道の流入過程 : 日本武道を中心に」、
韓国社会体育学会誌 17、pp.113~130、韓国**

この研究は、朝鮮末期から韓国が併合される 1910 年まで、日本の武芸が韓国に輸入される過程を述べたものである。導入は総督府によるものと留学生によるものとかあるが、柔道、剣道、空手道など日本武芸の原型は、本来体系化された韓国伝統武芸であり、それが文化交流とともに日本に渡ってスポーツ化され、そのスポーツ化された武芸が再び近代に韓国に輸入されたと述べている。

**ジョン マンジュン (2007) : 「武道教育発達史 : 韓国 (テコンドー)、中国 (ウーシュウ)、日本 (柔道、カラテ) を中心に」、
韓国スポーツリサーチ 18(1)、pp.157~166、韓国**

この研究は、各国それぞれの武芸の教育的価値と学校教育として定着する過程を述べたものである。

**キム ビョンテ (2007) : 「韓国伝統武芸の修練目的と現代的意義」、
大韓武道学会誌 9(2)、pp.57~97、韓国**

この研究は、韓国の武芸団体が提唱する修練目的を整理したものである。各団体は精神修養、心身鍛錬、伝統の継承などの目的を明確にしているが、その目的のように修練が行われているか否かについては不明であり、検討が必要であると提言している。

**ホ コンシク (2008) : 「伝統武芸振興法の法理解釈と課題」、
大韓武道学会誌 10(1)、pp.41~56、韓国**

この研究は、伝統武芸振興法の各項目に対する法的解釈とこの法律によって予測される統合団体の設立や伝統武芸の認定制度そして支援策などについて述べたものである。

**キム ウィファン他 (2008) : 「韓・中・日の武芸政策による韓国武芸振興方向」、
大韓武道学会誌 10(2)、pp.7~20、韓国**

この研究は、中国と日本の武芸振興政策を明らかにした上で、韓国武芸の現況と将来において展開すべきことについて述べたものである。

以上の先行研究を検討すると、①武芸の歴史的再構成、②現代韓国の社会と学校における武芸の意味や問題性について論じたものが専らで、文化人類学的関心としてはかろうじて李承洙論文が韓民族スポーツの創造として論じているにとどまっている。しかし李論文でも「伝統武芸」の問題は扱われていない。本研究が目指している「伝統武芸」の創造過程研究は、未だ着手されていない状況にあるといえる。